

対人社会心理学の研究と教育

— 関西大学における43年間を振り返って —

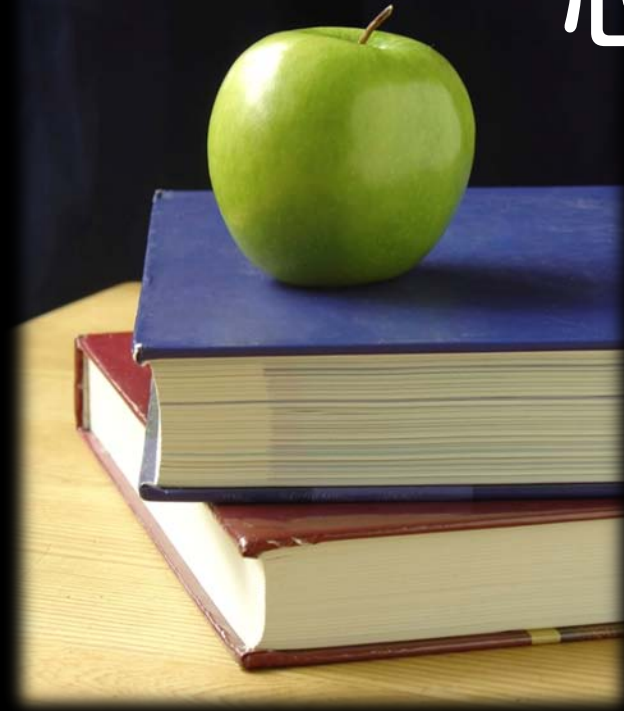
関西大学 社会学部

高木修

心理学との出会い

恩師との出会い

心理学研究の展開

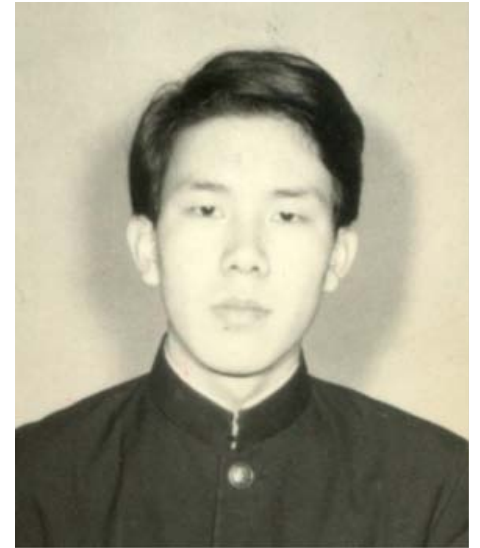


1960年代	1963年4月 京都大学文学部の3回生となり、専門教育課程の心理学専攻に進学
1970年代	
1980年代	

- 態度の質問紙調査法を
木下富雄先生(非常勤講師、大阪女子大学)
から学ぶ



- 態度測定法の一つであるSD法を
木下稔子先生(非常勤講師、木下先生の奥様)から学ぶ



- 社会心理学の講義で
廣田君美先生(非常勤講師、関西大学教授)から
Individual in Societyの態度の章の発表を指示され、
特に、態度構造論に興味を持つようになる



1960年代

1964年4月



4回生となり、“態度構造”に関連する卒業論文を提出

社会的態度

1970年代

1980年代

態度構造論

認知成分

感情成分

態度

行動傾向
成分



SD法

(Semantic Differential method)

相反する意味を持つ形容詞の対を用いてある態度対象について個人が抱く印象を評定することで態度の感情成分を測定する。

明るい	_____	暗い
柔らかい	_____	硬い

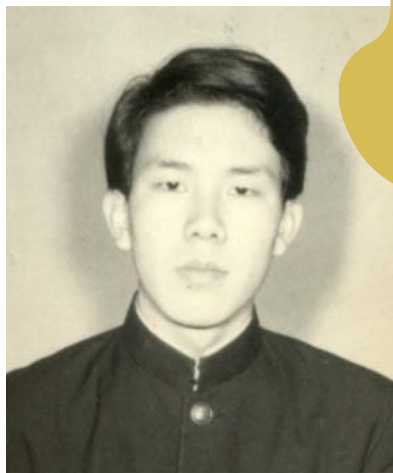
感情成分

BD法

(Behavioral Differential method)

相反する意味を持つ動詞の対を用いてある態度対象に対して個人がもつ行動の構えを評定することで態度の行動傾向成分を測定する。

近づく	_____	遠ざかる
重視する	_____	軽視する



行動傾向
成分

認知成分

感情成分

態度

重視する

軽視する

喜ぶ

悲しむ

(**C**ognitive)

行動傾向
成分

(**A**ffective)

近づく

遠ざかる

(**B**ehavioral)

1960年代

社会的態度



1965年4月

京都大学大学院文学研究科 修士課程に進学

1970年代

1980年代

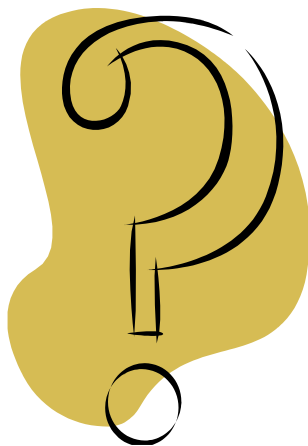
第7回日本社会心理学会大会

10月15日・16日・成城大学





木下富雄先生

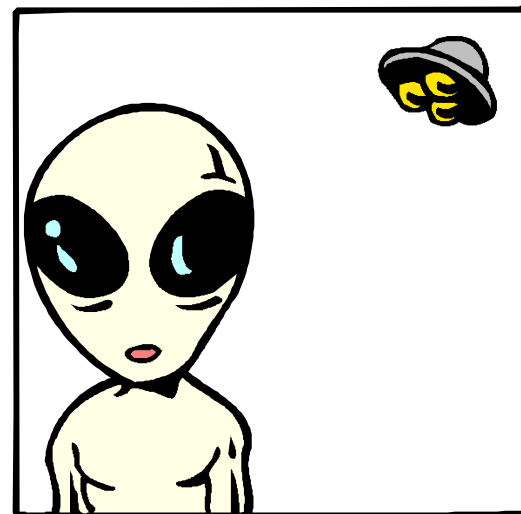


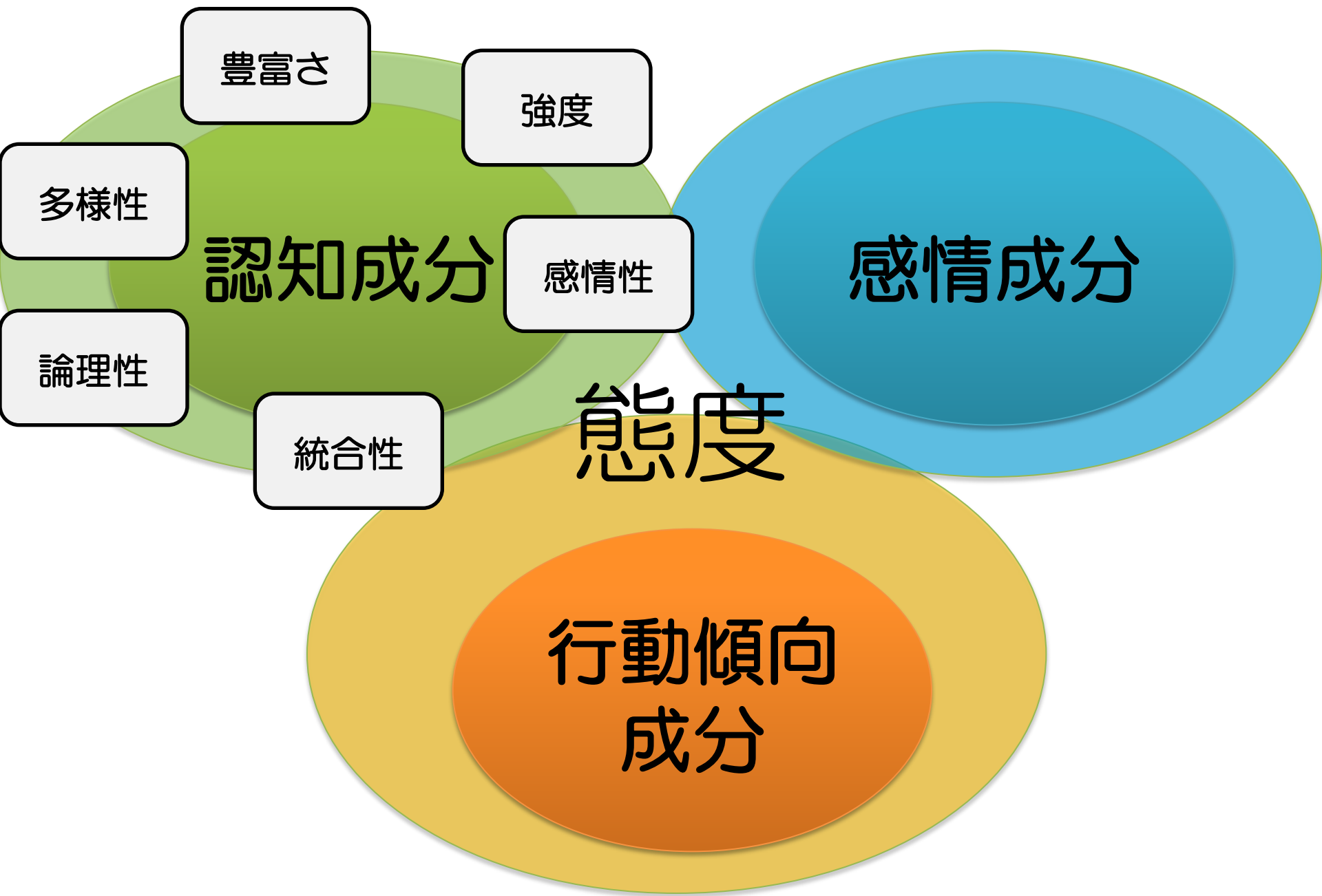
認知成分

火星人があなたのところにやってきて、

地球には
“安楽死”があるようですが、
それはどういうことですか？
教えてください。

と聞かれた時、
あなたはどのように説明しますか？







園原太郎先生



態度の 発達

EX) “安楽死”

自分自身にとってどれほど重要か

どれほど関心があるか

日頃誰かと話し合っているか

情報収集しているか

自己関与 (自我)

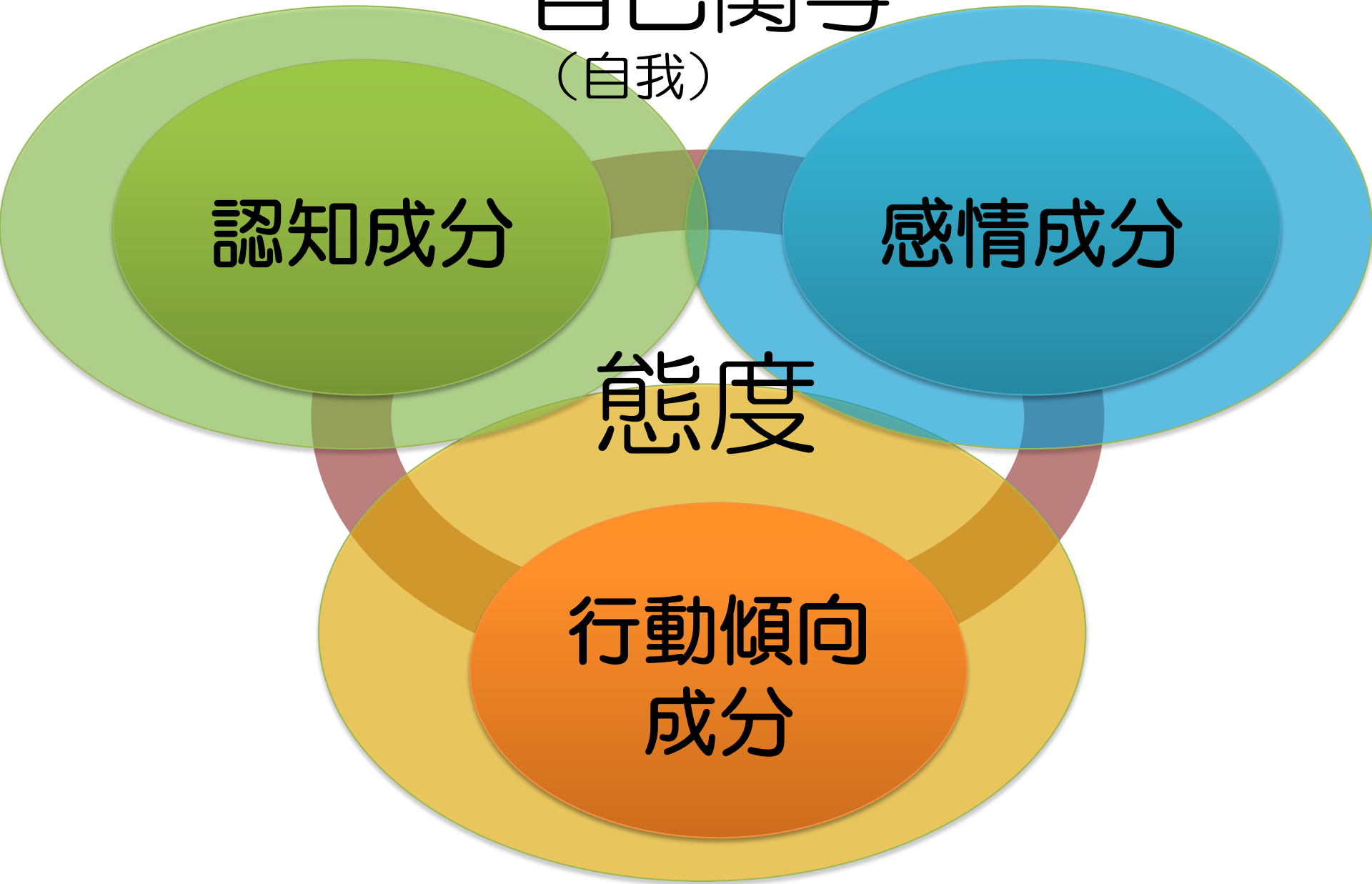
自己関与 (自我)

認知成分

感情成分

態度

行動傾向
成分



1960年代

社会的態度



1967年4月

京都大学大学院文学研究科 博士課程に進学

辻岡美述先生との運命的な出会い

1970年代

1980年代



辻岡美延先生
(非常勤講師、関西大学教授)



1960年代

社会的態度



1968年4月

1970年代

関西大学社会学部の助手に就任

1980年代

1960年代

社会的態度



1970年代

1970年

関西社会心理学研究会（KSP）を創設

1980年代

＜三人組＞



金児暁嗣 先生



田尾雅夫 先生



当時 高木修 助手
(生みの親)

関西社会心理学会 (KSP) 若手研究者の 勉強会

- ★会長なし
- ★規約なし
- ★出入り自由



木下富雄 先生
(育ての親)

1960年代

社会的態度



1970年代

環境
問題



1975年 - 1981年

関西大学経済・政治研究所の研究員となり、
態度と行動に関する研究を現実社会の問題で
展開

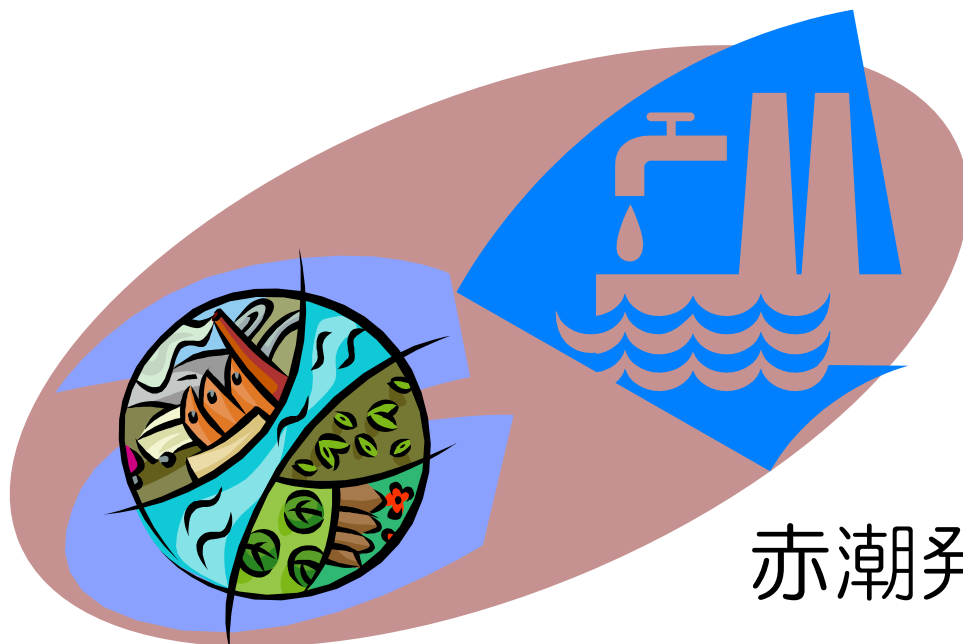
1980年代



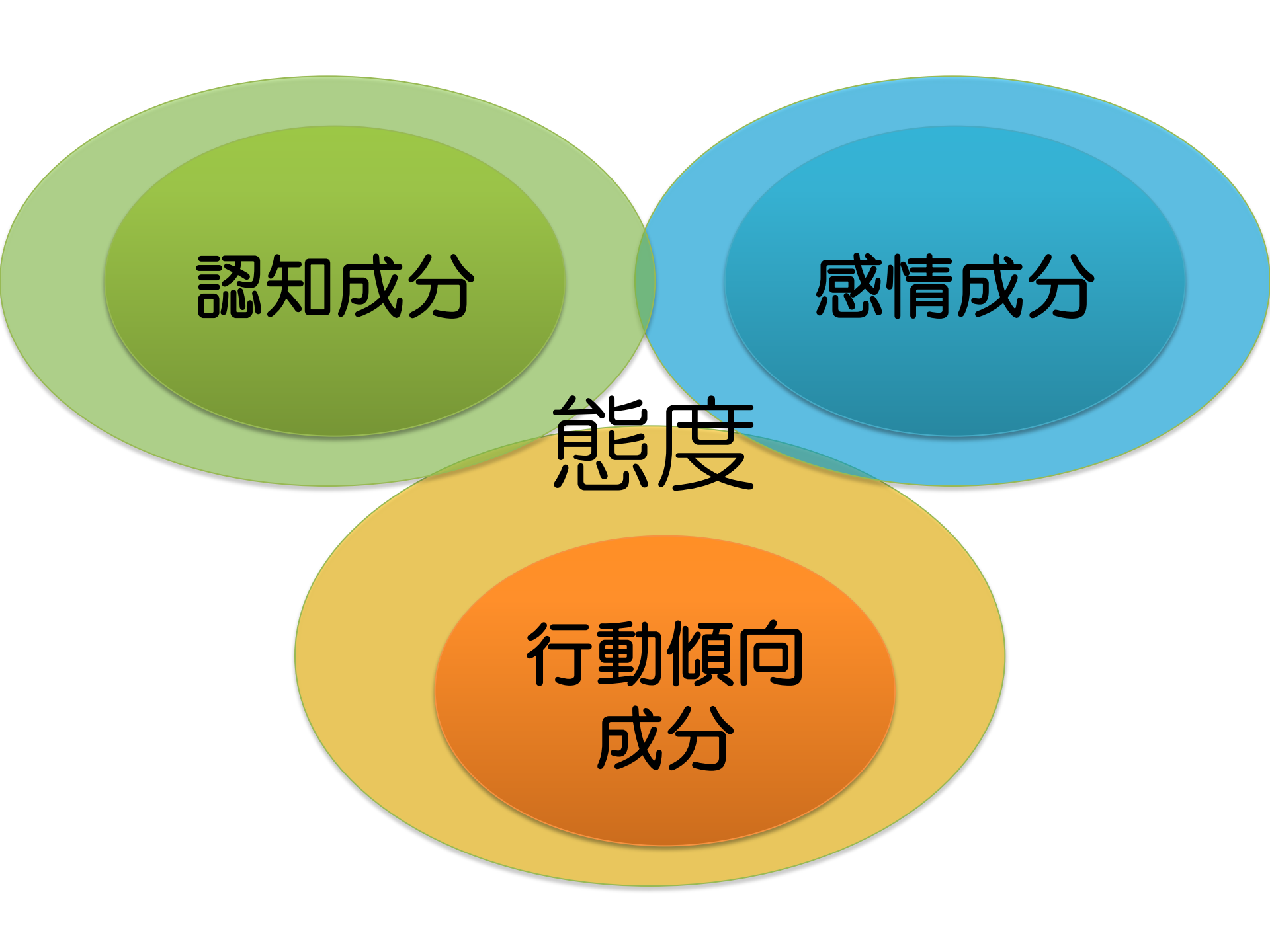
合成洗剤



身体への悪影響



赤潮発生



認知成分

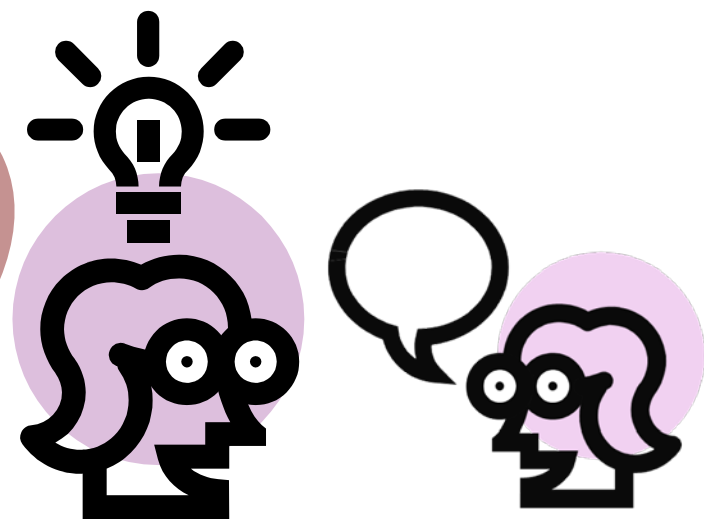
感情成分

態度

行動傾向
成分

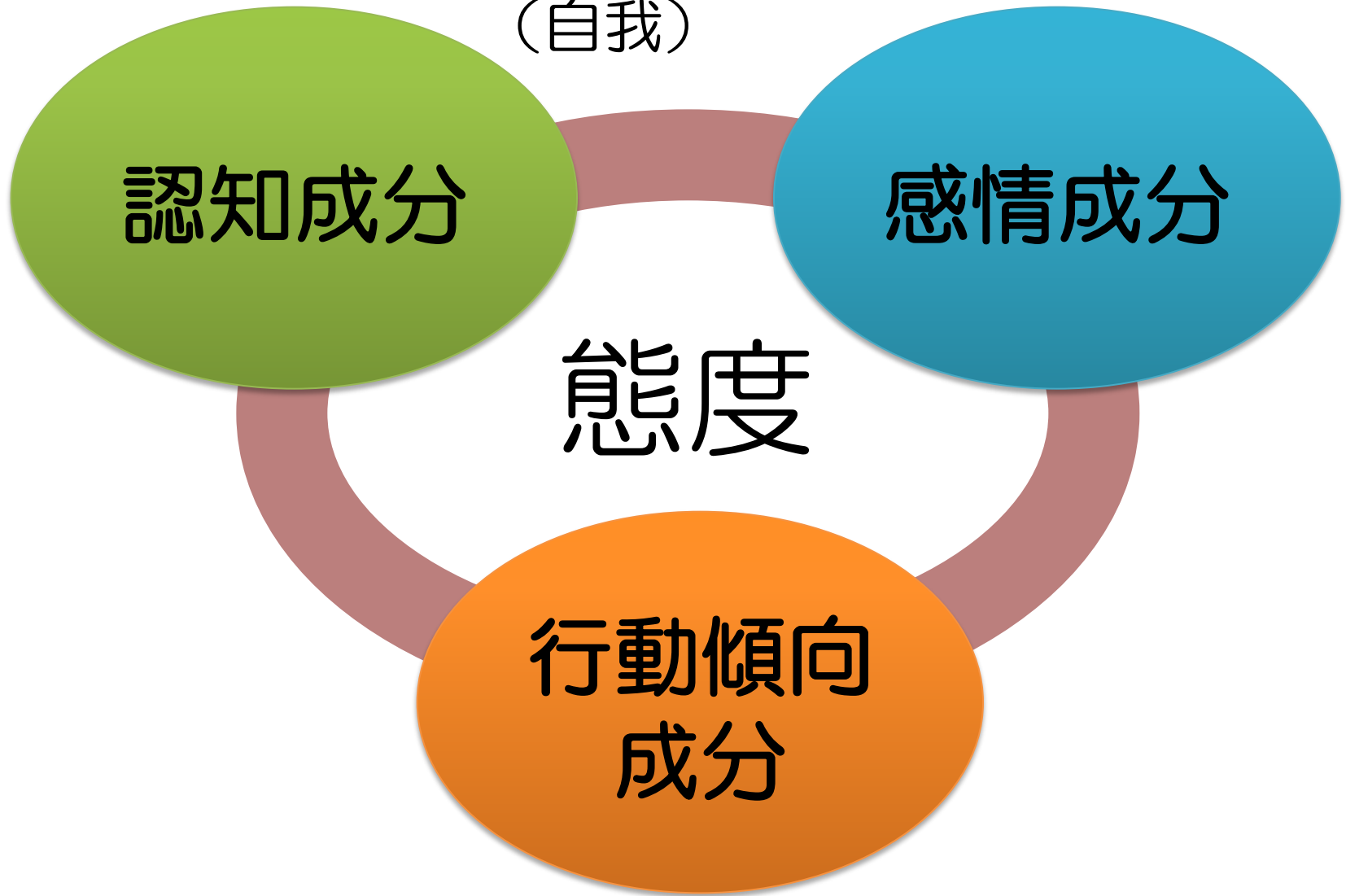


身体への悪影響



赤潮発生

自己関与 (自我)



1960年代

社会的態度



1970年代

環境
問題



運転
行動



1974年

安全運転管理者講習会と
運転行動に関する研究を開始

1980年代

1960年代

社会的態度



1970年代

環境
問題



運転
行動



援助
行動



1980年代

フィリップ・ジンバルド教授と



1979年

米国スタンフォード大学において、1年間、態度と援助行動に関する研究に従事

援助行動のタイプ分け

援助に関する行動意思決定過程

援助動機・非援助動機の解明

援助動機(援助促進要因、1983)

1. 援助の必要性と可能性判断
2. 援助責任の分散不可能
3. 援助・被援助の好ましい過去経験
4. 援助者・被援助者の好ましい人格特徴、援助者の良き感情状態
5. 非援助出費の忌避と援助報酬の期待
6. 援助者と被援助者の親密な関係

非援助動機(援助抑制要因、1987)

1. 援助不必要性と非援助出費・援助報酬の非予想
2. 援助・被援助の好ましくない過去経験
3. 援助者・被援助者の好ましくない人格特徴
4. 援助責任の分散可能
5. 援助の不可能性判断

1960年代

社会的態度



1970年代

環境問題



運転行動



援助行動



被服行動



1980年代

1980年

被服の社会心理学的な研究のための講習会と被服社会心理学研究を開始

1989年

被服社会心理学（SPC）研究会を創設

1960年代

社会的態度



1970年代

環境
問題



運転
行動



援助
行動



被服
行動

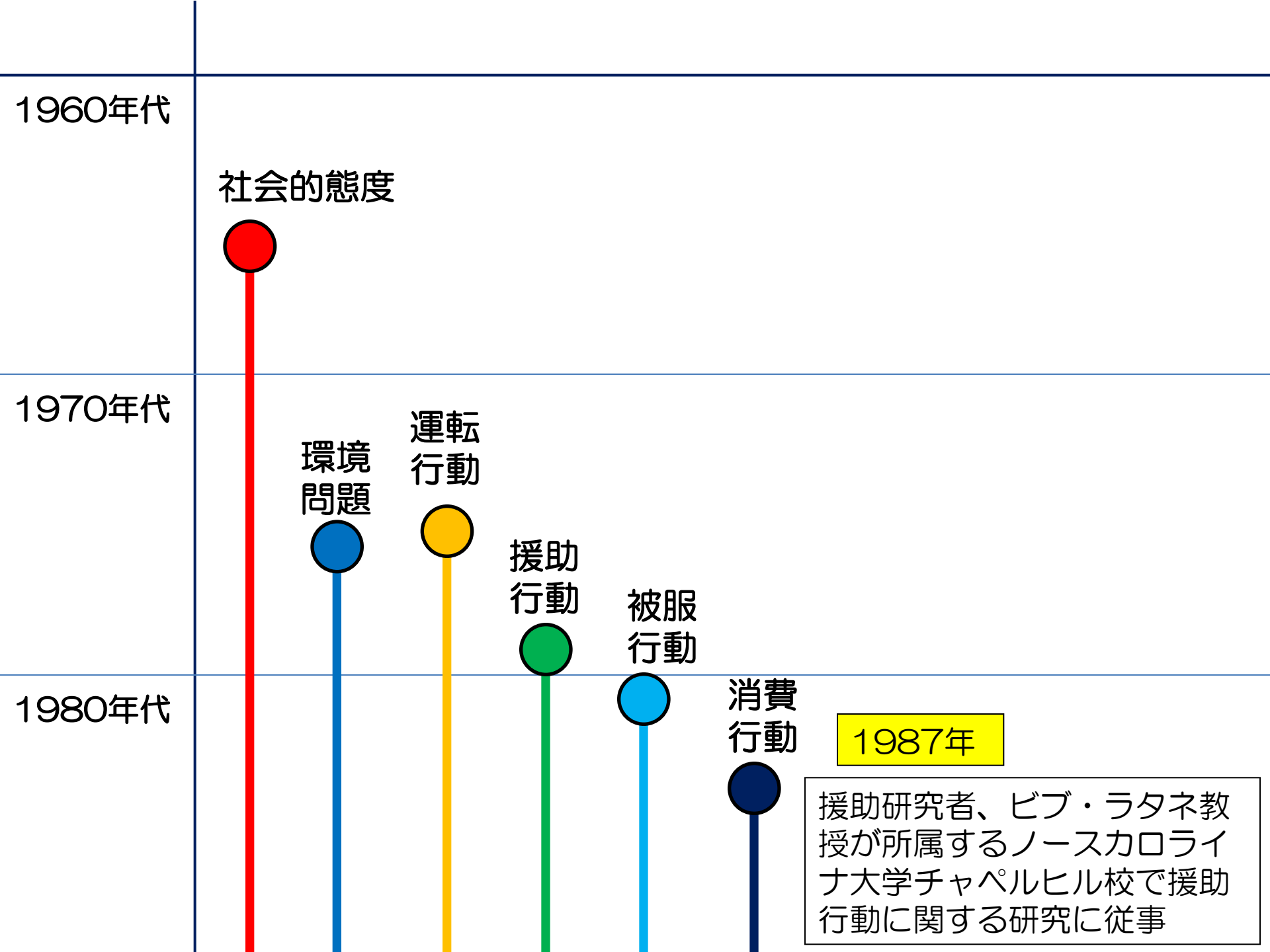


1980年代

消費
行動



消費者行動に関する講習会
と店舗内購買意思決定過程
に関する研究を開始





ノースカロライナチャペルヒル校



ラタネ教授が所長を務めていた社会科学研究所のCAPS
(Computer Assist Panel-survey System)

ラタネ教授が所有していたセスナ機



彼の息子

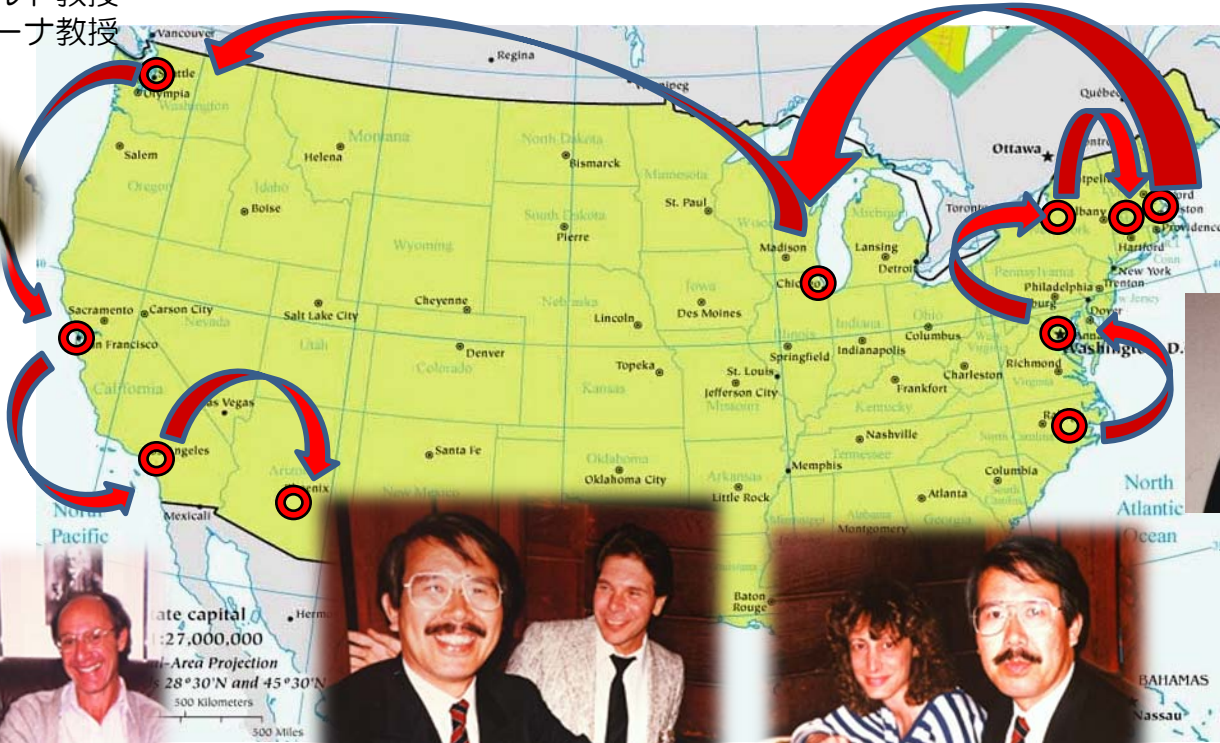
ビブ・ラタネ教授

彼女



ダニエル・バータル教授

フィリップ・ジンバルド教授
その奥様、クリスティーナ教授



フィッシャー



ダーリーとシュワルツ



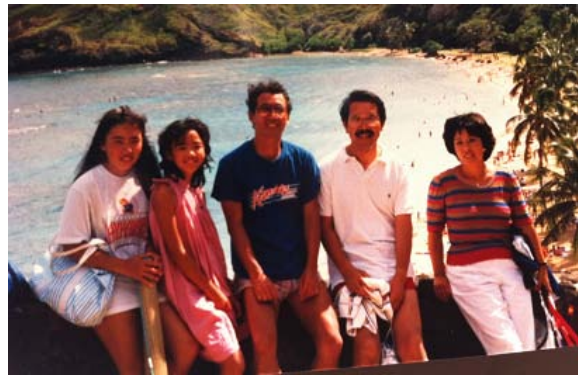
ワイナー教授と



チャルディーニ教授と



ナンシーアイゼンバーグ教授と



ハワイにて 金児教授とご家族と



オーストラリアにて
マイクスミソン教授夫妻と

1990年代

1994年

阪神・淡路大震災の発生に伴い、被災者支援行動に関する研究に従事

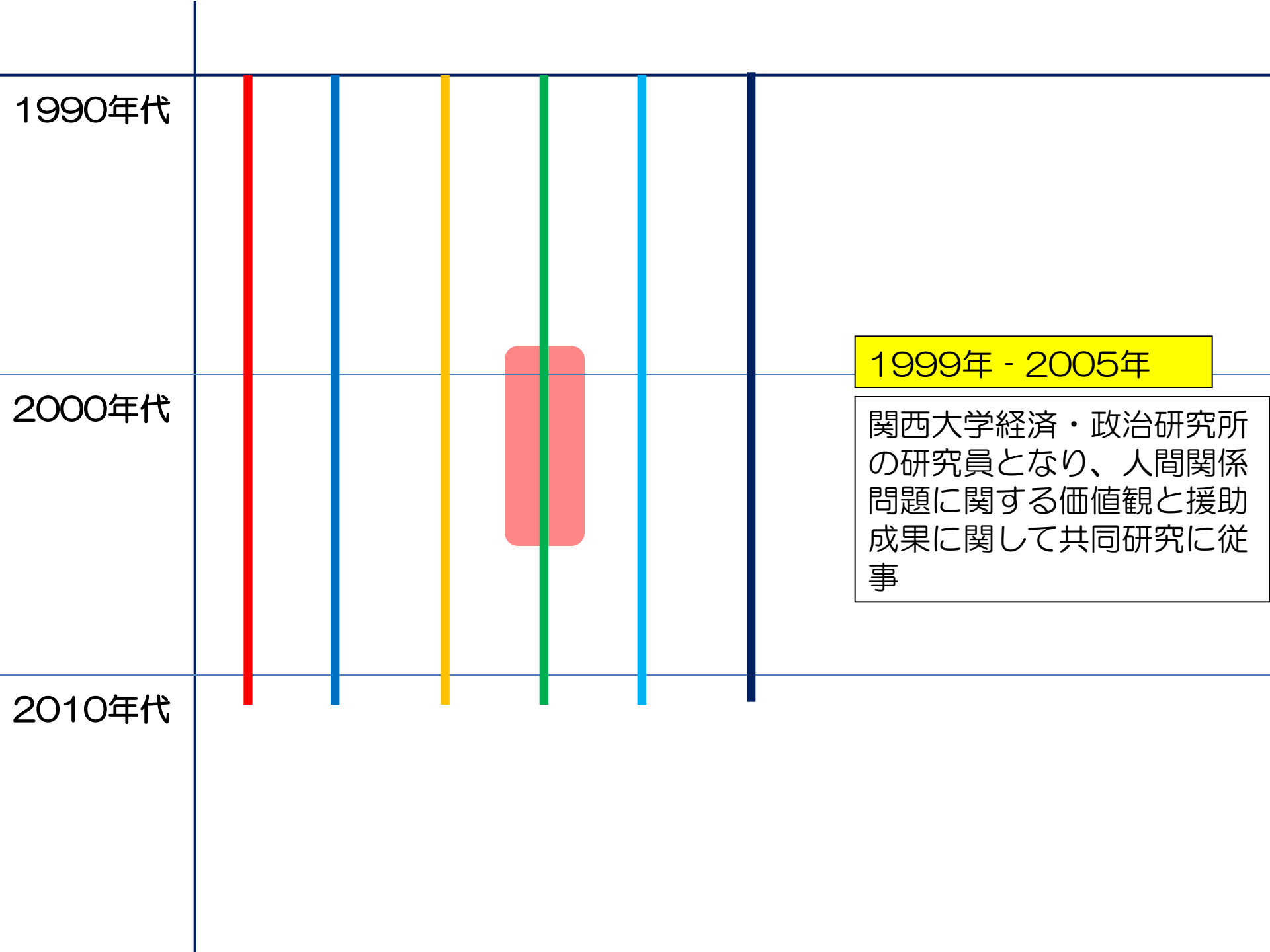


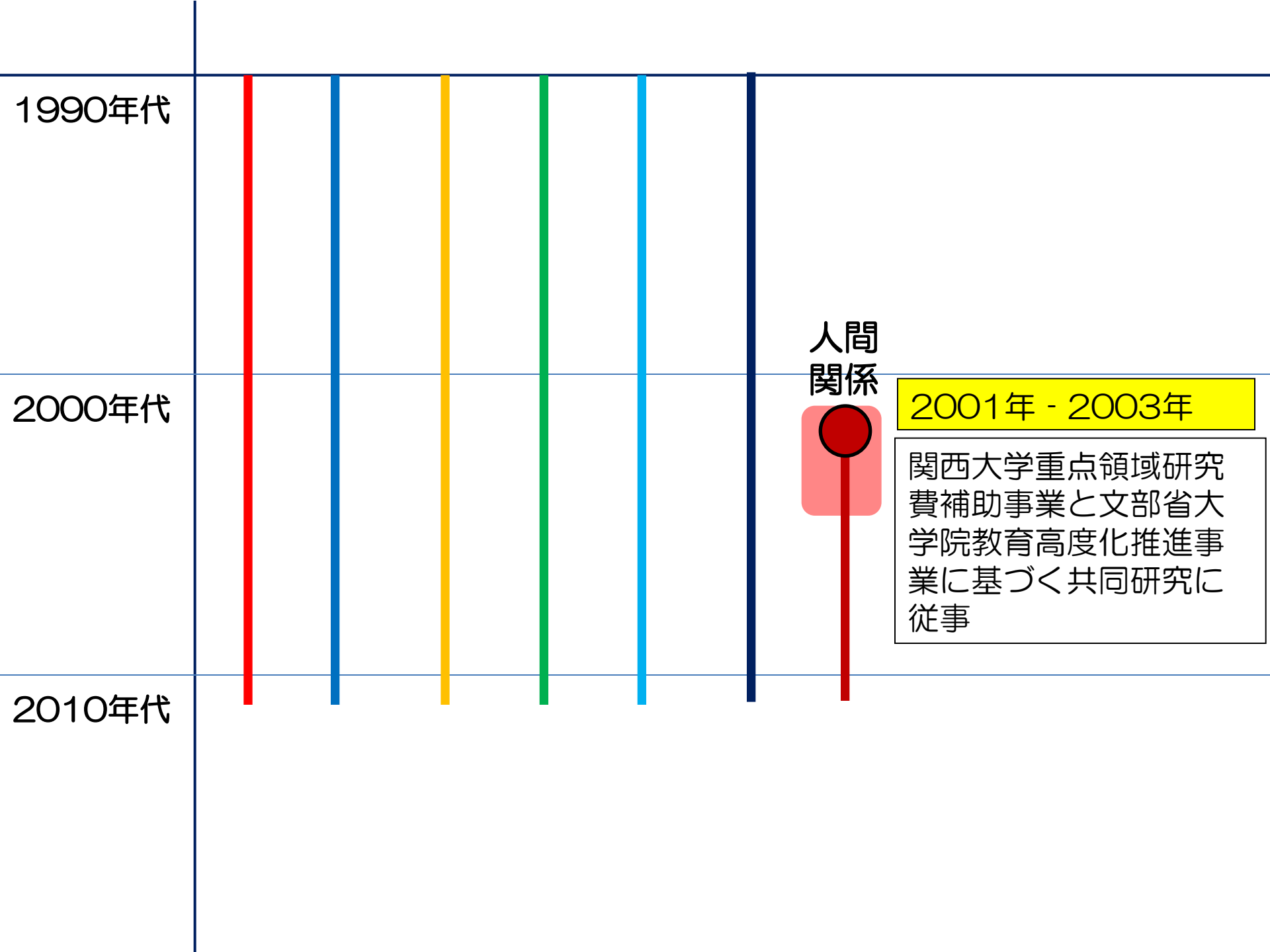
2000年代



2010年代







1990年代

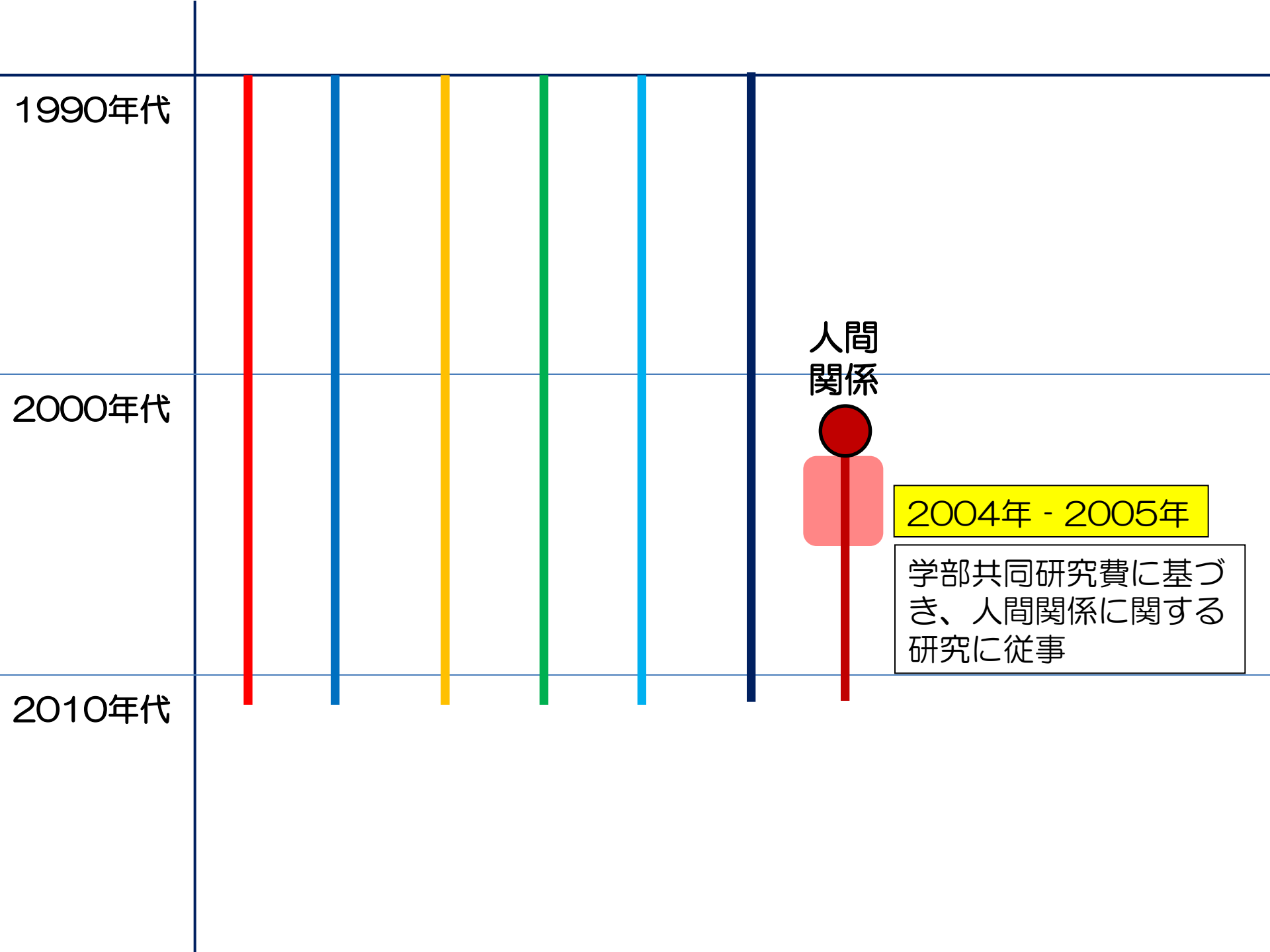
2000年代

2010年代

人間
関係

2001年 - 2003年

関西大学重点領域研究費補助事業と文部省大学院教育高度化推進事業に基づく共同研究に従事



1990年代

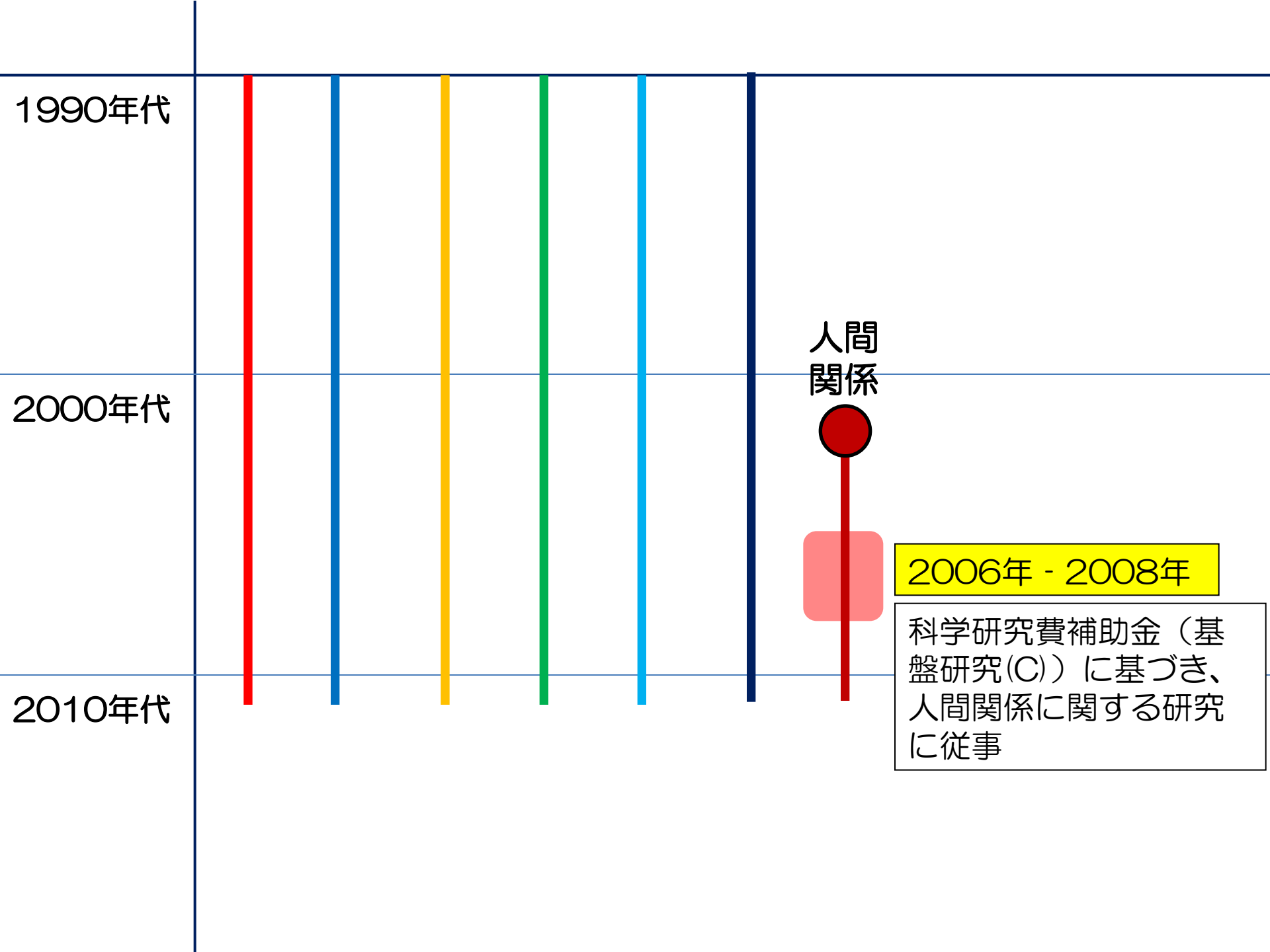
2000年代

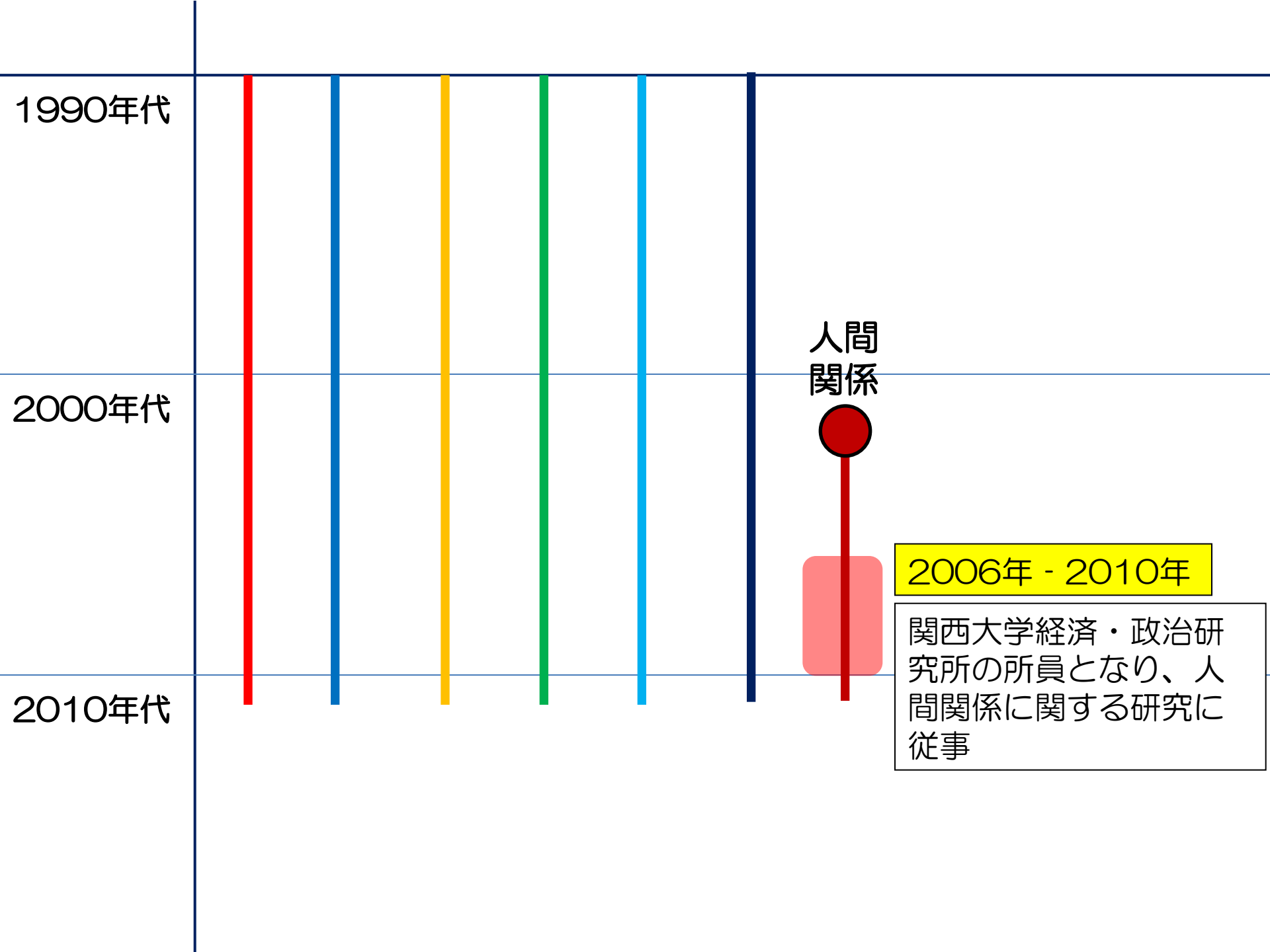
2010年代

人間
関係

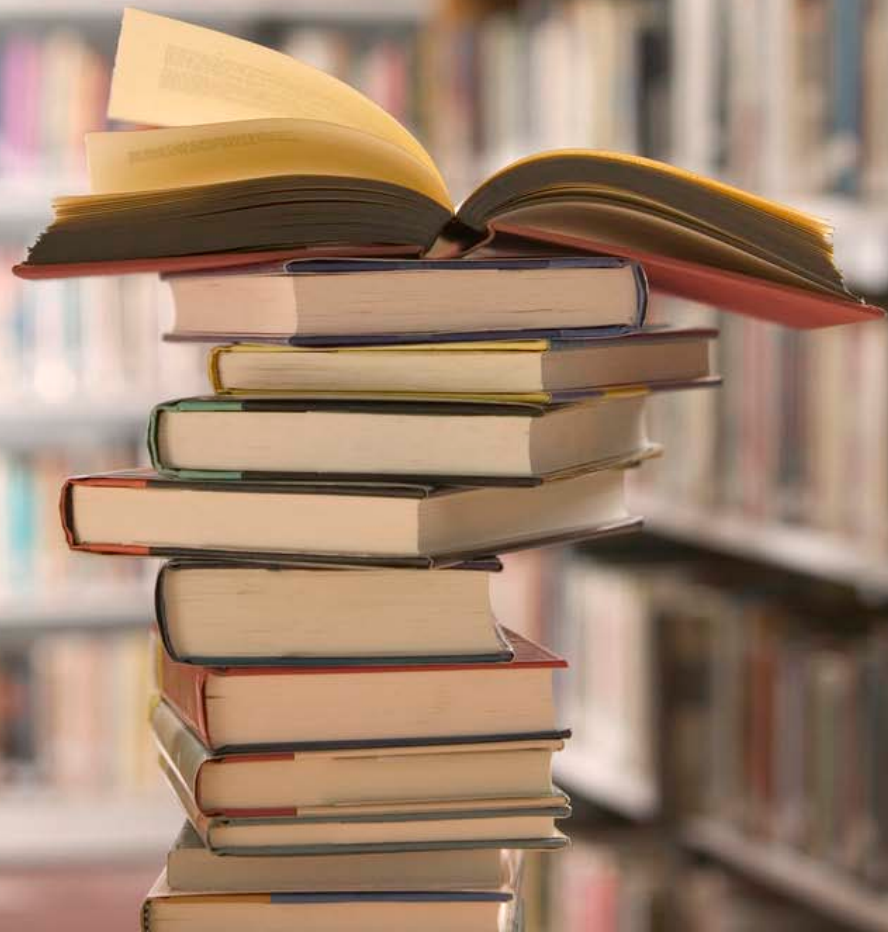
2004年 - 2005年

学部共同研究費に基づ
き、人間関係に関する
研究に従事





研究を指導した 学部生と 大学院生たち



学部ゼミナール生



社会学部の概要

社会学専攻

心理学専攻

マス・コミュニケーション学専攻

社会システムデザイン専攻

オープンキャンパス Open Campus

社会学部の魅力を 教員・学生が紹介！ 社会学部まるわかりガイド

学生コラム

教員コラム

ゼミ・講義・研究紹介

ゼミ・研究室HP一覧

在学生の方へ

卒業生の方へ

Seminar's Columns

第26回 2006年7月27日

学びと教えの場、「社会心理学高木研究室」！！

心理学専攻 高木 修

人は人々の中に生まれ、人々と関わりながら育ち、人々の中で生涯を終えます。したがって、人々とどのような人間関係を形成するのか、また、その中で人々とどのように行動し合うのかで人の生き方は大いに異なってきます。家庭、学校、職場、地域で起こっている心理・社会問題の多くは、この「対人関係」や「対人行動」の問題と深く関わっています。そのような理由で、これらの問題の研究が必要なのです。

そこで、学部の高木ゼミは、「対人関係、対人行動の社会心理学的研究」を研究・指導のテーマに掲げました。この呼びかけに応じて集まったゼミ生たちは、例えば、友人関係や恋愛関係、家庭内の親子やきょうだいの関係、教室内の教師と生徒や生徒同士の関係、職場の上司と部下や同僚同士の関係などについて、また、それらの関係の中で、例えば、恩恵を与え合う援助行動、危害・損害を与える攻撃行動、意思や情報を伝達するコミュニケーション行動、化粧や被服による装い行動などについて、さらに、それらの病理現象である孤独、対人不安や対人恐怖などについて、社会心理学の立場から研究を行っています。

さて、タイトルを、学びと教えの場、「社会心理学高木研究室」としましたが、これは、ゼミのもう一つの特徴を説明したかったからです。研究室というと、教員の個人研究室を想像するでしょうが、その意味では使っていません。私は、学部での教育・研究と大学院での教育・研究を有機的に関連づけ、学部と大学院の間の交流を盛んにすることによって、それぞれにおける教育・研究の効果が一層高まると考えています。この信念にしたがって、有効と思われることには積極的にどんどん挑戦してきました。だから、「研究室」は、それらの新しい教育・研究方法の効果を検証するための実験場という意味で使っています。



心理学専攻
高木 修



大学院ゼミナール生

	修士課程
1992年	●寺鍛冶昭彦 ボランティア研究-現代ボランティア観について-
1994年	●矢島誠人 視線の相互作用とそれを規定する要因の研究
1995年	●池上和之 自己開示・開示伝達が三者関係に及ぼす影響
1996年	●小城英子 阪神大震災におけるマスコミ報道の功罪 ●玉木和歌子 災害時における援助活動の研究-阪神・淡路大震災におけるボランティア活動- ●橋爪裕子 看護婦の組織および職業に対するコミットメントと それらを規定する要因の研究 ●吉川聡一 運転中による操縦動作の意思決定過程 そのプロトコル
1997年	●加藤裕美子 看護婦の労働環境について-身体的自覚症状の観点から- ●山口智子 セルフヘルプグループに関する一考察
1998年	●栢原匡裕 社会的スキルの獲得を規定する要因とその獲得時期について

	修士課程	博士課程
1999年	●乙井一貴 大学生における被服による印象管理、他者との心理的距離との関連、および自己意識、他者意識との関連 ●小樽雅章 阪神大震災時の企業の援助活動に表われた経営理念とモラルの関係-グローバル・エコノミー下の経営理念の価値について- ●花房弘行 反社会行動に関する規範意識について ●福井康子 青年期における孤独感と依存性、および対処行動について	●Michael Cannon Adjustment of Assistant English Teachers in Japan
2000年	●生間香穂里 Minority Influenceに関する実験的研究 -Minorityの行動スタイルに着目して- ●池崎宏昭 社会的相互作用におけるサービスの質 -航空機内サービスの場における検証- ●川畑実和 コンピュータを介した自己開示が自己についての認知におよぼす影響	●西川正之 被援助者の反応過程に関する研究

	修士課程	博士課程
2001年	●阿部晋吾 怒り表出反応の認知的規定因及び表出 困難時の認知的再評価 ●妹尾香織 援助者に及ぼす援助行動経験の効果の検討 ●福山 聡 対人不安生起過程モデルの検討 ●吉田容子 不適切なソーシャルサポートの悪影響 モデル ●曹 陽 中国北京市における中・高校生の性意識と 性行動の実態解明-「実践性のある」学校性 教育の指導方針の作成に向けて-	
2002年	●牛田聡子 着装意識に関する研究 -着装行動を規定 する着装規範意識と個人差要因（自意識・ 自尊心・独自性欲求）- ●辰巳雅紀 親密化過程における友人概念構造の変化 ●戸口愛泰 集団志向的自己評価と自己呈示方略の選択 過程 ●中岩 愛 青年期における依存構造の解明-社会的相 互依存関係と関連させて-	●吉川聡一 運転者の行動意思決定過程に関する研究 -ハザード知覚に基づくリスク判断と リスク回避行動に焦点を当てて-

	修士課程	博士課程
2003年		●小城英子 「劇場型犯罪」とマス・コミュニケーションに関する社会心理学的考察 -神戸連続児童殺傷事件における犯人像の分析から-
2004年	●尾田貴子 環境配慮についての態度と行動-買い物袋持参イベントを題材にして- ●高木麻未 友人とのつきあい方が孤独感に及ぼす影響 -理想基準・社会規範・現実の付き合い3視点からの分析- ●永岡理香 迷惑行為に関する若者の規範意識とその性差-痴漢神話尺度を用いて- ●福井斉 社会的アイデンティティ理論における自尊心感情仮説の妥当性の検討-阪神タイガースファンを対象とした調査より-	●小樽雅章 企業の向社会的経営を促進する要因の研究-企業と市民・消費者との社会的相互作用を基軸に- ●太田 仁 援助要請態度に関する実証的・実践的研究 ●妹尾香織 援助行動経験が果たす心理・社会的機能に関する研究
2005年	●鬼塚佳奈子 医療場面におけるコミュニケーションエラーの生起要因に関する研究-組織要因と個人要因のダイナミックスに着目して- ●丸本奈央 セルフハンディキャッピングが生起する心理プロセス-自己評価維持への対自的・対他の方略-	●阿部晋吾 怒りの表出-その規定因と影響過程- ●田中 優 互惠的相互依存関係の研究-その関係形成と発展を説明する個人内および個人間過程モデルに基づいて-

	修士課程	博士課程
2006年	●渡辺深春 大学生の志向する就業形態に関する研究 -大学生の就職に対する意識調査から-	●曹 陽 性行動を規定する性態度の形成過程 およびその影響要因の解明-中国北京市 の若者を対象としたアンケート調査に 基づいて-
2007年	●井上まや 関係親密化への開示促進・抑制-特に、開 示抑制の機能とその相互性の影響- ●原川智子 電子空間における望ましくない行動-若者 のそれを規定する社会・心理的要因の検討-	
2008年	●佐藤貴之 慢性疾患患者の家族の心的過程-Unfinished Taskの遂行が悲嘆に与える影響- ●藤原 勇 二者間における信頼の相互性に関する研究 -課題遂行場面における信頼したい・信頼 されたい欲求に着目して-	
2009年	●中西美樹子 関係親密化に及ぼす身体接触行動の相互作用 的文脈効果-推定された動機に基づく感情喚 起と対人評価が互恵性を介して関係発展に与 える影響- ●森川 愛 夫婦関係の維持・安定化を規定する要因の 検討-共感的役割遂行の衡平性に着目して-	

	修士課程	博士課程
2010年	●小栗亜耶乃 高齢化社会において高齢者を支援する化粧療法ボランティア活動について-活動ボランティアとしてのメイクセラピストに着目して- ●中川由理 被服による印象管理スキルとしての被服選択行動とその選択過程の検討-職場の着装規範に適合する被服が着装者に対する印象評価等に及ぼす影響に着目して- ●堀内亜希 非行少年の地域内処遇に携わる市民ボランティアの態度とその変容-BBS会員のボランティア活動とその経験効果に着目して- ●山中淑子 子育て支援が親の心理的親準備性の構造化に及ぼす影響-親育ちを目指す育児学習と擁護的養育行動の発達に着目して-	●田中 泉 持続可能な援助的人間関係を構築するための心理・社会的要因について
2011年		



THINK × ACT

関西大学

KANSAI UNIVERSITY